

2014年  
11月21日  
金曜日

# 山田 仁 准教授（イギリス文学） グルスキーの写真

「人間性」や「愛」は経験することではできないが、言葉で合理的に説明するのはなかなか困難な概念である。しかし、感じとすることは可能であろう。二項対立は今日あまり流行らないが、「人間」と「非人間」を二項対立的に比較しながら「人間」を感じとろう。

アンドレアス・グルスキー Andreas Gurskyは、巨大なパノラマ写真を得意とするドイツの写真家である。東京で二〇一三年、大阪では二〇一四年に個展を開催した。作品を四点挙げる（講話当日その簡易版を配布した）。99セント（1999）は、米国版100円ショップのプロアを天井から見下ろす。整然と陳列された夥しい商品が豊かな色彩を放ち、縦線と横線の規則性が眩しい。カミオカンデ（2007）は、岐阜山中の旧神岡鉱山の地底深くに設置されたニュートリノを捕捉する実験

施設の写真である。この作品は色彩的には単調であるが、無数の突起物が99セントと同様の幾何学的な造形美を描く。ピョンヤン（2007）の壮大な人文字は、一糸乱れぬ秩序を映し出す。三作品の共通項は、規格化された人工美、縦と横の線が規則正しく整然と交差する幾何学的な美学である。これらの作品には今一つの共通点がある。それは視点に關わる。いずれも人間の視覚には不可能な視界であり、デジタルカメラのみ可能な視野である。つまり視点が無数に拡散し、各々の商品、突起物、そしてボードが「私を見ろ」と言わんばかりに自己主張する。実物は巨大な作品であって、無数の視点は全ての物を鮮明に視覚化する。人間の視力は関心事にのみ焦点が合い、それ以外を除外する。カメラの非人間的な視力が人間の視力に過大な負荷を負わせる効果は、鑑賞者に疲れ

と倦怠感を催させる。膨大な選択肢と過剰な自由は人間を疲労させる。99セント、カミオカンデ、そしてピョンヤンは、高度な規格化に抗う被写体の存在にも気づかせる。人間の存在である。人工美、幾何学的な点と線の充滿する平面に、人間が規格化を阻むかのように謙虚に映し出される癒しを提供する。これらと対称的な作品がバンクコクⅡ（2011）である。タイ国の首都バンクコクを流れるチャオプラヤ川の川面には廃物や油が浮遊し、画面から悪臭が漂ってくるかのようなのである。この作品には規格化された人工美が不在である。さらに視点は無数に拡散しない。被写体の自己主張は比較的慎ましい。規格化された美を体験した後では、バンクコクⅡが再現する自然な光と視野、汚染、無秩序が鑑賞者に安堵感をもたらすことも事実であろう。

人間について今は深く考えず、あとになって思い返してみるとよいだろう。ただ次のことを強調しておきたい。グルスキーの膨大な作品群から四作品を選出するという決断は、私の独断に依る。この講話で私は他の作品、あるいは他の写真家の作品を選ぶこともできた。だがそれをせず、これら四作品に絞り込んだのは私の恣意である。他の作品を選抜していたならば、全く異なる「人間」が立ち現れたことであろう。99セント、カミオカンデ、そしてピョンヤンが提供する無数の視点が鑑賞者に疲労感を喚起するように、選択の組み合わせは無数にあり、個々の組み合わせが異なった人間像を溢れ返らせ、考える者を疲れさせる。「人間」とは、99セント、カミオカンデ、そしてピョンヤンにおいて鑑賞者の注目を要求する細分化された被写体である。人間にはバンクコクⅡが必要である。